

これまでのこと①

「からむし織体験生」から「かすみ草農家」へ

私が昭和村で暮らすようになって、今年（2023）で15年になる。昭和村には、約300年ほど前から栽培されている繊維植物「からむし」に触れながら約1年間を過ごすという「からむし織体験制度」があり、私はその15期生として村にやって来た。1年目は体験生、2年目は翌年の体験生の補助員として過ごし、3年目から現在の夫のもとで、かすみ草などの切り花栽培農家の仕事を始めた。

2年目を終えたあとの進路を考えたとき、まだ昭和村で暮らし続けたい、と思った。研修生に進級するという選択肢もあったけれど、「からむし」を中心に据える生活というより、昭和村の暮らしがあって、そこに「からむし」が紛れているような。「からむし」をたったひとつの特別なものとしてより、村や自分を構成する様々なもののひとつとして繋がっていったらという、おぼろげな理想があった。

研修生という道を選ばないとすると、村で暮らすための仕事を探さなくてはいけない。なにか「昭和村の仕事」と言えるような、この土地に根ざしたことに関わってなくては、一人でこの場所に暮らし続けることは厳しいように思えた。なかなか道が開けず模索する日々の中、ある時参加した講演会で、「かすみ草」という言葉を耳にした。講師は奥会津書房の遠藤由美子さん、昭和村のかすみ草農家・会津学研究会代表として、夫（菅家博昭）の名が挙げられた。「あ、ここにはかすみ草がある！」とハッと、農家さんのお手伝いをする仕事ができないかと思いついた。この時の気づきのおかげで、今がある。

「かすみ草」の出荷のピークは、「からむし」の収穫期に重なる。仕事として花農家に入る以上は、夏に「からむし」に関わることは諦めるしかないと考えていた。2メートルもの積雪になる冬は農閑期となるので、夏の間は妥協なく「稼ぐ」ための仕事をしなければならない。小規模家族経営の農家に雇用をしてもらったことを思うと、何としても経営を支える力になりたいと思った。

当時一人暮らしをしていたリョウハラ集落からオオマタまで、毎日原付バイクで喰丸峠を越えて通い、畑仕事をした。昭和村に来る前、沖縄の離島でサトウキビの仕事をしていたことがあり、その時に農業の気持ちよさ、楽しさを知った。「からむし織体験生」を志したのは、それが織りの講習だけでなく、「畑から」という内容だったから。それがなければ、昭和村に来てはいなかったと思う。

かすみ草の仕事をはじめてしばらく経ったある日、オオマタの集落のなかに「からむし」が群生している場所を見つけた。そこは、一人のおばあさんが高齢になり別の集落に住む娘さんの家へ引っ越されたことで、数年前に手放された「からむし畑」だった。オオマタにはないと思っていた「からむし畑」。驚きと同時に、「出会い」だと感じた。この「からむし畑」を、引き継ぐことができたなら…。そんな思いが湧きあがった。